

園長だより

第二号 八月
竹鼻保育園
園長 川出昭順

大変な暑さです。大人はこの暑さに耐えられないことがあるほどです。私は朝、子ども達を出迎えて挨拶を交わしているのですが、あまりの暑さに倒れるほどです。そうならないようにポカリスエットを飲んで出来るだけ頑張っております。

子ども達は元気です。プール遊び、砂場での泥んこ遊び、水鉄砲、更にボディペンティング、楽しいこと限りなしです。この間も年長組のプール遊びを見ていましたら、井藤先生が女の子達を指さして、「ここに可愛い女の子のお地藏様がいます。女の子はお手々を合わせてください。男の子はその可愛いお地藏様にお水をかけましょう。お地藏様はお水をかけられたら、ふー、ふーっと息を思いっきり吐き出してください。ようお願いドン。今度は男の子がお地藏様です。ふー、ふーっと思いっきり息を吐き出すんだよ。最後に、ここに大きな大黒様がいます。みんなでお水をかけて下さい。」大変な騒ぎで、とっても楽しいプール遊びでした。

「三つ子の魂百まで」当保育園の目標として「報恩感謝の心をもって心身共に豊かな子を育てる」を掲げています。具体的にはどういふことなのかを考えています。身、つまり体は三度の食事（食物アレルギーのお子さんは大変です）によって大きくなります。ところが、心はそう簡単なことではありません。何かを機械的に与えたら育つ

ものではありません。三つ子がこの時期に与えられるのは一人の人間として成長する基礎の基礎ではないかと思っています。

我が家のネコ このような例はどうかと思いつながらお話しするので、我が家に真っ白いネコを飼っています。そのネコは生まれてから虐待を受けていたようで、もらってきたときの有様は今にも死にそうな感じでした。私はネコ好きですので、大事に育てたのですが、なかなかなつかなく、機嫌が悪いと手当たり次第家族をひつかいたり、かみついたりしました。そのかみつき方が半端でなく小さいながら力一杯かみついたため、そこから血が出てきて恐怖のネコでした。普通ならこんな凶暴な猫ならほりだしていたのでしょうけれども、私自身が猫が好きでしたので、家族の迫害から守り、かみつかれて血を出しても可愛がりました。すると、今では家族は一人も信用されていませんが、私一人たよりにし、私の帰るのを待ち、椅子に座っていると膝の上ののってくつろいでいます。

幼児期のポイント ネコでさえそうなんです。人間とネコを一緒に出来ませんが、幼児期の育て方のポイントを知ることが出来るようです。育て方を一つ間違うと、ひっかき、かみつくと人生になってしまうことでしょうか。この経験から私は、「三つ子の魂百まで」ということわざは、この幼児期というのは人間関係を築く基礎を作り上げるのではないかと思えます。虐待とかいじめのような場に置かれたとき、心の傷は癒しようになく荒んだ人生になることは想像に難くありません。愛情を持って育てるとき、人を信ずることが出来る心が育てられるのでないかと思っています。親を信頼できる、家族を、また保育園においては保育士を信頼できる。先生に会う

と嬉しい、少しずつ信頼できる人が増えていく。その心が育てられないと人を信ずることが出来ない、時には非行の道となってしまうかも知れません。

難しいことのように思われるかも知れませんが、決して難しいことではないですね。普通に育てれば自然に一人前の人間になることができると思っています。

こんな記事を見ましたので紹介します。

スマホ 最近よく見かける光景ですが、幼児さんを連れてお母さんがずっとスマホを見ながら座っていることがあります。中にはスマホを見ながら寝かした赤ちゃんに哺乳瓶でミルクをあげているお母さんの姿さえ見られます。今、子育てはどのようなに変化しているのでしょうか。

赤ん坊の時は肌を離すな

幼児の時は手を離すな

子どもの時は目を離すな

少年の時は心を離すな

これが**子育ての極意**だと仰おっしゃった方がいます。子育てを一通り終えられたお母さんは、「本当にその通り！」と頷うなづくことでしょう。子ども達の成長の時期により、大切なポイントがあるからです。

乳児期はまさに肌感覚で、自分が大切な存在として扱われていることを確かめていく時代かも知れません。スキンシップという言葉がありますが、本来人間は、今、ここに存在している人にしか触れることが出来ません。ですから、触れられた人は、今、ここに存在している、尊厳を持った一人の人間として扱われたという感覚を持つようになる。臨床発達心理士の先生は仰っている。人間にとってこの感覚はとてもポジティブな意味を持つのだそうです。なぜなら、次のような皮膚科医の検証があ

るからです。「皮膚水痘症の子ども」というのは例外なく、情緒的に安定して優しい」と述べられています。その理由として、子どもの母親は一日に何度も全身の皮膚に丁寧に薬を塗ぬるからだと考えています。母親からのスキンシップを頻ひんぱんに受けることで、愛情や尊厳をも受け取っているように思われます。

私達は今、大変な時代に差し掛かっているという危機感を持たなくてははいけません。子育ても原点に立ち返り、どうぞスマホを手から離して、子ども達とスキンシップを楽しんで下さい。そのことが子ども達の心の安らぎと自信に繋がっていくからです。

『この文は「旭川別院だより」という北海道の大谷派の別院広報誌から引用させてもらいました。旭川大学短期大学部 幼児教育科教授 五十嵐路子先生の文です。』

私に気づく（仏教の話）

スマホについていろいろな害を聞かされても、やっぱりスマホのない生活は考えられない、ですね。スマホを否定されるとかえって反発することしか出てきません。悪いこととしていっているのでないから私の勝手やがね、というのが本音でしょう。子育てに息が詰まりそうだが、息抜きでやっている。否定的にいわれれば言われるほど聞く耳を持たないようになります。しかし、私のこの心によって大事なことを見失っているのではないのでしょうか。

「私に気づく」ことと「私が気づく」ことは違います。「私が気づく」は「私が」が主語ですから私の想定内のことです。ところが「私に気づく」は思いもなかった私に気づく、どうしてそんなことが起こるのか。これから少しづつ考えていきたいと思えます。